マフィアのボスですが何か？

麗雪・L・レイユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マフィアのボスですが何か？

【Ｎコード】
Ｎ７７２０Ｘ

【作者名】
麗雪・Ｌ・レイユ

【あらすじ】
平凡な中学生活を送りはじめた土田鈴蘭こと蘭。
運動神経は悪いが、クラス一の秀才。
しかし、それは蘭の表の顔だった…
裏の顔はマフィアのボス！？
蘭はこの平凡な毎日を送り続けることができるのか！？

幸福が訪れる／繊細

「蘭！いったよ！」
「ふぇ？」
蘭の頭上に飛来するボール。
見上げる蘭。
ゴーン――――――
蘭の顔面に見事なまでに直撃した。
「あちゃ～…」
「い、痛いよ…」
鼻の頭を抑える蘭。
「ごめん…あんたが運動神経ないのをすっかり忘れてた」
笑い飛ばす少女。
蘭の様子からしても、よくあるようだった。
「紅（べに）…わざと…」
横でつぶやく少女。
「やっぱり…私をからかって楽しんでいるんだね、紅は」
脱力する蘭。
（うん…諦めよう…）

今は四時限目の体育の授業。
競技はバレーボール。
（“運動神経がない”…か）
人知れず蘭はため息をついた。
キーンコーンカーンコーン――――――――――――
授業の終了を告げるチャイムが鳴った。
「うっし、昼飯だ～」
ものすごいスピードで教室にもどる紅。
「…撫子、ゆっくりもどろうか」

「うん、紅についていく必要ない…」
そういうと二人も教室へとむかった。

「いや～、うまかった。わらわは満足じゃ」
ほっほっほ、と扇子を手に持ち扇ぎそうな雰囲気で紅が言った。
「あんたは殿か何かか」
すかさずつっこむ蘭。
「うむ、殿じゃ」
「…紅に何を言っても無駄」
撫子がボソッとつぶやいた。
「撫子ヒドッ！」
そんなたわいもない話をしているときだった。

蘭は急に背後から声をかけられた。
「土田」
振り返ると一人の少年がいた。
「えっと…どちら様？」
「隣の一年二組の大木木蓮だ。土田…こんなとこで悪いんだが…」
（なんだろう…こんな教室の中で…）
中学となれば男女の会話は極端に減る。
その中で話があるというのだからきっと大切なことなんだろう、と蘭は思っていた。
「俺と付き合ってくれ！」
ぶほッ――――――
隣でむせる紅。そんな紅の背中をさする撫子。
「えっと…ごめんなさい。まだそんなこと考えられなくて…」
「そうか…時間をとらせて悪かったな、じゃ」
大木はそういうと教室から出ていった。
「ひゅ～、もてる女はツライねぇ」
「蘭の気持ち、分かる。今はまだ考えられない」

「…うん。大木に悪いことしたかな…」
うつむき真剣に悔いる蘭。
「ううん、考えすぎ。今はそれでいいと思う」
微笑む撫子。
「ありがとう、撫子。ちょっと気が楽になったよ」
笑みを返す蘭。
「うわぁ…もてる女の悩みだ…」
なんとも言えない表情でそんな二人を見ていた紅であった。

包容力／熱狂

「ウキッ、ウキキキッ」
紅の頭の上で一匹のサルが跳ねた。
「ルモもそう思うってさ」
「ウキッ！」

なぜ中学校にサルがいるのか、そう思うのが普通だ。
それはこの世界がそういう世界だからである。
この世界にはたくさんの性質を持つ生き物がいる。
例えば、物を燃やす能力をもつ生き物や物を氷らせる能力をもつ生き物。
それぞれ同じ種類の生き物でもまったく違う能力をもっている生き物もいる。

そんなこの世界では生まれてすぐに、自分にあった能力をもった生き物と契約をする。
契約は、お互い（契約者と生き物）の同意により成り立つ。
だが、生まれたての赤子には言葉はおろか、文字も伝わらない。
そんな中でどうやって自分にあった生き物と契約するのかというと、本質によって相性のいい者たちが契約する。
本質とは、この世界の生き物（人間も含む）すべてが持っているもので、生まれたときに分かる。
そして、相性のよい生き物同士で契約を行う。

小学校では自分の契約した生き物（契霊）について学び、中学校では次の段階を学ぶ。
次の段階とは、契霊の力を引き出す、ということだ。まぁようは実践である。

そういう理由により、各地域の中学校では契霊を学校につれてくるのは常識なのである。

「相変わらず似たような性格なのね、紅とルモは」
あきれたように言う蘭。
「契霊は契約主に似るとは習ったが…ここまでとは…」
真剣に考え込む撫子。
「はぁ…うん…もういいよ」
疲れ果てた様子の紅は、机へと倒れこんだ。

昼休みもあとわずかとなった頃、三人組の少女たちが三人で談笑をしていた蘭に話しかけた。
「土田さん、ちょっといいかしら？」
「うん…何の用かな？」
（やな予感がするなぁ…）
内心ではそう思っていたが「無理です」とはさすがに言えなかった。
「よくも…よくも私の大木君を振ってくれたわね！」
「私の華樹君もよ！」
「この男好きが！ちょっと頭がよくて、ちょっと可愛いからって調子に乗ってんじゃねぇよ、バ～カ！ブスはブスらしく三木たちとず～っと遊んでいればいいのよ」
「なんなら、三人で同性愛でもしちゃえば？」
　　きゃははっ、きゃはははははっ――――――――
三人の下品な笑い声が教室に響く。
（何しに来てるんだろう…馬鹿らしいなぁ…）
蘭は心の中で思ったが、声には出さなかった。
が、ほかの二人は違ったようだ。
「…そうだな、三人仲良くというのも悪くない」
「はは、いいねそれ。私もハミゴにならなくてすむし」
（頭痛が…）

三人がそれぞれの反応で返した。
ようは、「黙っとけば？うぜーんだよ」ということだ。
「き、貴様らぁ！！」
「調子にのるなぁ！！」
そういうと、少女の肩に乗っている猫の毛の色が白からオレンジ色へと変わった。

思慕／貞節／才能

少女の手には一丁の拳銃。
「身の程をわきまえなさい！私はあの土村家の娘よ！調子に乗らないで！！」
そういうと、銃口を蘭へと向け勢いよく引き金を引いた。
銃口からは銃弾の形をしたオレンジ色の炎が放たれた。
その炎は真っ直ぐ蘭をめがけて飛んでいく。
（まずい！このままだとあの霊式が蘭に当たる！！）
そう思うが早いか、撫子は蘭の前へと歩み出た。
「撫子――――！？」
悲鳴交じりの蘭の声が教室内に響く。

撫子の足元にいる兎が蒼く光り始め次の瞬間には撫子の前に水の壁が完成していた。

「な、私の炎の弾丸を相殺するなんて…」
床にひざをつき、信じられないと呟く少女。
その正面では撫子が怒り狂っていた。
「あなたは私を怒らせた…。私の大切な友達に攻撃をした…。学校の中では使ってはいけない霊式を一時の感情に任せて使って！」
撫子は次々と言葉で相手を攻めていく。
撫子が言うことはごもっともなことばかりで言い返せずに、小さくなることしかできない少女。

そこに一人の女の教師が入ってきた。
「誰！さっきここで霊式を使ったのは！！」
半ば切れ気味の教師の姿にしぶしぶ手を挙げる撫子と少女。
「あなたたちね…事情は指導室で聞きます。来なさい」

二人を連れて教室を出て行く教師。
その場にいた残りの関係者である蘭たちはただ連れて行かれる撫子と少女を見送ることしかできなかった。

愛／温かい心

「帰ってこなかったね、撫子」
紅がおもむろに口を開いた。

あの後撫子は結局帰って来なかった。
二人で学校中の先生に尋ねてみたが、誰一人として答えてくれなかった。
撫子がどうなったか分からないまま最終下校時刻となり、二人は仕方なく学校の門をくぐった。

（私のせいだ…私があの時もっと早く動いていたら撫子は霊式を使わずに済んだ！それなのに…）
思わず下唇を噛締める蘭。
唇から血が滴（したた）る。
「ウッキー！ウキキキキー！！」
紅の頭の上で飛び跳ねるルモ。
「ウッキー！」
必死に叫び訴えるルモ。
（ルモ…何言ってるか分かんないけど、励ましてくれてる…）
そう思うと少し気分が楽になった。
「蘭のせいじゃないよ」
不意に今まで隣で黙っていた紅が口を開いた。
蘭は自分より少し背の高い紅を見上げた。
「って、ルモは言ったんだよね～」
「ウッキー♪」
仲良く、まるで言葉が通じいてるかのように話す紅とルモ。
「あ、ほらルモはアタシの契霊だから。なんとなく分かるんだよね～、何言いたいのか」

笑いながら言う紅。
（これだけ仲がいいもんね…当然、か）
蘭もそんな二人につられて口元がほころんだ。

「さて、アタシは家こっちだからここで。――――蘭の家はそっちでしょ？」
「うん。――――また明日」
そういうと、二人はそれぞれ帰路へとついた。

●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○

「ただいま」
蘭が家の扉を開くと、一組の男女が玄関にいた。
「おかえり、蘭。遅かったね？大丈夫だった？」
心配そうにたずねる男。
歳は17ぐらいだろう。そばにいると落ち着くような空気を持っている。
「うん、大丈夫。心配かけてごめん、睡兄（すいにい）」
「謝らせたくて睡蓮は言ったわけじゃないんだぜ？そんなに小さくなるなって」
隣にいた女も言った。
ワイルドな笑みを浮かべる女。
睡蓮と面立ちが似ていることからおそらくは兄妹だろう。

「ところで薔薇姉（ばらねえ）…何企んでるの？」
ぎくっ――――
「べ、別に～♪」
目を逸らす薔薇。
「知ってる？薔薇姉。人はやましい事があると目を逸らすんだよ？」
今度は蘭の目をジーっと見つめる薔薇。

（薔薇姉…見事にはまる…ちょっと楽しいかも）

「で、結局どうしたの？薔薇姉」
「別に～♪」
意味深な笑みを浮かべ続ける薔薇。
「…仕事…あるの……？」
と蘭が言い切る前に薔薇が蘭に抱きついて（飛びついて）蘭の体を揺さぶった。

「そうだぜ！仕事だぜ！！早く行こうぜ～。蘭が帰ってくるの待ってたんだからさ～」
なおも体を揺さぶられている蘭。
「ば、薔薇！蘭の目が回ってるよ！！」
手を止める薔薇。
ばつが悪そうに視線を泳がす姉を蘭はいつものこと、と割り切っていた。
「わ、わりぃ…今は制御されてるんだったな…」
「いいよ、気にしてないから」
苦笑交じりの言葉になったが蘭は心底楽しそうに言った。
「それより仕事でしょ？行く用意するからココで待っててて」
あぁ、二人が頷くのを見て、蘭は自分の部屋へと入っていった。

やさしさ／甘美

「ま、待ってくれ！」
後ずさりする男。
「み、見逃してくれ！！」
男の正面にはフードを被った少女が一人いた。
その者の周りには、一匹の黒に青紫の蝶が飛んでいる。
「何でも言うことを聞く！絶対だ！！だから――――」
「一つ教えといてやる」
男の言葉を遮るように話始める少女。
「この世界に“絶対”はない。お前が見たのだとすれば、それはまやかしだ」
その場に崩れ落ちる男。

「お前に選択肢はない」
少女が、右手を前へとそっとのばすと男は一瞬で氷付けになっていた。

少女の手のひらから零れ落ちる白い花びらが、氷付けの男の足元に落ちる。
「よい夢を…」

立ち尽くす少女。

「終わったか？麗」
いつの間にか、背後に立つ女。
「あぁ。――――――後を頼んでもいいか？」
「おぅ、任せとけ。――――――先に、睡と一緒に帰っとけ」
ワイルドな笑みを浮かべる女。

無言で頷く麗。
次の瞬間には、たくさんの黒に青紫の蝶と共に麗は消えていた…
●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○●○
「おはよ、蘭」
蘭が教室に入るなり、窓際の席の紅が声をかけてきた。
（…あぁ…今の名前は“蘭”…だっけ…？）
「…おはよ、紅」
自分の席で、机に倒れこむ蘭。
（…気分悪…吐きそう…。体の中をぐちゃぐちゃにされたみたいだ…）
「ちょ、蘭大丈夫！？顔色よくないよ？」
心配そうに駆け寄る紅。
（あぁ…心配かけたらいけない…）
蘭は苦笑いを浮かべた。
「少ししんどいだけだから…大丈夫だよ？」
思わず疑問系になった言葉。
「心配だな～。蘭は変なとこ無理するからな～…」
苦笑いしながらぼやく紅。

キーンコーンカーンコーン――――――――――
チャイムが鳴る。
自席に戻る生徒たち。
ガラガラッ――――――――――
扉を開ける音と共に教室に担任の女教師が入ってきた。
そして、その後ろにつくように撫子が入ってきた。

「ちょ、撫子！！どうしたの、その包帯！！」
紅が思わず叫んだ。
撫子の体のいたるところに、不自然に巻かれたたくさんの包帯。
駆け寄ってきた蘭と紅から目を逸らす撫子。
「…別に…こけただけ…」
（十中八九嘘だな…こけたにしては傷のある位置がおかしい）
心の中でつぶやく蘭。
「嘘」
すかさず口にする紅。
「幼稚園のときからアンタとずっと一緒にいるけど、アンタがこけたとこアタシ見たことないもん」
キーンコーンカーンコーン――――――――――
チャイムが鳴った。

「授業を始めるわよ。みんな、席につきなさい」
教師に言われ、渋々席につく三人。

「…放課後…言う…」
小さな声でつぶやいた撫子。
「ダメ」
「昼休み」
蘭と紅にそう言われた撫子は苦笑いを浮かべた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7720x/

マフィアのボスですが何か？

2011年11月21日17時04分発行